

「僕の家族～里親・里子の12年～」を見て

先に当HP「オ母サンのもつ機能、心の居場所、しつけ（「雑学BN」の覚え書関係（Ⅱ）P、2007.11.06.：参照）」で触れたが、単に遺伝子上での親の意味ではなく、いつも身近にいてくれて生きていく元気を貰える存在の人を象徴的に「オ母サン（一般的には、成長期の子どもには母親、またはそのような存在の人：ex.保育士）」と表記する。

「オ母サン」の語意を理解するに相応しいと思われる番組「僕の家族～里親・里子の12年～」に接した。

重度の仮死状態で生まれ知的障害が生じ、養育を拒否した実父母は乳児院に子どもを預け、その後行方知れずとなった。

身寄りがいなく施設で過ごす8才になったその子どもを養子として、血の繋がらない親子が共に苦難を乗り越え、支え合いながら築き上げた確かな「家族」のドキュメンタリー番組であった。

実子のなかった養父母にとっては初めての子どもで、障害児への偏見など、一家は少しずつ乗り越えていたが、7年目に養父が突然がんで亡くなった。

その時、悲嘆にくれる養母を支えたのは、中学生に成長していた里子であるその子ども。

支え合う2人は、養母の実家の母や姉弟の心を動かし、帰省の時、里子も家族に包まれる幸せを感じている。

今、21才になった里子は、「家族の絆」が社会に出て行く自信にも繋がり、小さな会社で働き始め、将来自立するためのグループホームを訪ね歩いているとか。

血が繋がっている親であっても、子どもの虐待、親子間の殺害事件等、また、親の期待に応えようとする葛藤からか不登校や閉じこもり、非行に走る子どもたちの報道にしばしば接するが、この家族の姿を知ると、いつも身近にいて生きていく元気を貰える場所として、また、親は子を支え、親は子に支えられる「家族の関係」、「家族の絆」とは何かを改めて考えさせられた。

人は人との関係の中にこそ「心の居場所」を求め、互いに助け合う最初の人間関係は恐らく家族であろうと思うだけに、子育て最中の親には、また、成長期の子どもに係わる専門職の方々には、「オ母サン」と表記する語彙の意味を今一度確認しておいて欲しいと願う。